

## 特集

## 福祉作文（中学生の部）

寒川町福祉作文コンクールで優秀作文に選定された作品の中学生の部の一部をご紹介します。



「ふ」だんの「く」らしを  
「し」あわせに  
旭が丘中学校三年 阿部 百葉

中学二年生の冬、私は学校の授業の一環として老人ホームでの職場体験に行かせて頂きました。沢山話かけてくれる方、カラオケで何曲も元気に歌われている方、赤ちゃんが食べる様な流動食をスプーンですくって食べる方、ベッドに寝たきりの方、たくさんのお人がいらつしゃいました。食事の介助をさせて頂いたり、ボールを使つての運動のお手伝いなどをさせて頂きましたが、一人一人のおじいちゃん、おばあちゃんに合わせたお手伝いのやり方がわからなくて戸惑いました。若い私達は、食事をしたり、服や靴の着脱などごく当たり前に出来る事だけれど、お年寄

りには大変な事が沢山あって、お手伝いして守つてあげなくてはいけない事が多くある事を知りました。たった二日間の体験だったので、全然役に立てなかつたけど、「ありがとね」と何人の方が言つて下さつてとても嬉しかったです。ホームの職員の方も「中学生の皆さんが来てくれるつておじいちゃん達、とっても楽しみにしていたのよ。」とお話してくれました。

現在、日本の六十五歳以上の高齢者の割合は二十七・三パーセント。総人口が減少する中で高齢者人口は増加傾向が続き、約二十年後にはおよそ三人に一人が老人という世の中になるとの事。経済的に高齢者の方が困らないように支えていけるのか。介助する若者の人口の減少など、直面している数々の問題を、私は勉強して学び考えて解決していかなくてははいけません。三年後には選挙権も与えられます。多くの意見に耳を傾けて学びたいと思います。

体力的に一番元気な若い私達世代は、社会に守られて生活させてもらっています。時々学校に行く事や勉強する事が面倒に感じたりする事があるが、よく考えると、何て浅はかな思いだと反省します。私達が不自由のない生活を送れているのは、大先輩であるおじい

ちゃん、おばあちゃんが平和な世の中を築いて下さったからです。だから私達若い世代が出来た事は何とやらなくてはいけないと思います。介護職員の不足問題、それから保育士不足問題をよく耳にします。職員の方に頼るばかりでなく、私達若者がもっと直接、幼児や老人、障害を持つ方達と関わる時間を作るべきだと感じます。部活動などで先輩が後輩に様々なことを伝えていくように、チームを組み、チームの中で話し合つたり伝え合つたりし、幼児や老人、障害を持つ方々に何が出来るかを知る事。そして接し方などを学び、覚え、職員の方々の手まといにならないように役に立てたいのではないかと思います。体力的に元気な私達が、もっと社会の人達と関わることでできる時間と体制があつてほしいです。

小さい子供達に「福祉」とは何かを説明する時は、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに。特定の誰かだけでなく、みんなが幸せになれるように取り組む活動や仕組みの事なんだよと話します。人は一人では絶対に生きられません。みんなが幸せに暮らすために互いに助け合えるように、社会の一員として学んで考えて行動しようと思います。



## ほんの少しの勇氣

旭が丘中学校三年 打田 里奈

私が小学校五年生の時、母親がいない私の家に祖父と祖母が来てくれました。祖父と祖母は、小さい頃に私と沢山遊んでくれていたようですが、あまりにも小さかった頃だったので、その時の自分は初めて会うような感覚でした。少し緊張しながら、「わざわざ来てくれてありがとうございます。」と言い、色々なお話をしました。

そして数日後に、祖母は足が悪く、変形性股関節症という病気を持っていることを知りました。本来なら動けないはずなのに、私たちのために毎日電車で私の家まで来てくれました。そのことを知ってから、私は祖母に感謝の気持ちを伝えなくてはいけない、とずっと思っていました。

ですが、当時小学校五年生の私は反抗期で、なかなか素直に感謝の気持ちを伝えることができませんでした。今思えば、なんて酷い言い訳なのだろうと思います。それでも、当時の私は素直になれず、ぶっきらぼうに「ありがと。」と言うのが精一杯でした。

何ヶ月か後、祖父と祖母は私の家族と一緒に暮らすことになりました。きつと、祖母の電車での行き来が辛くなってきたからだと思っています。詳しいことはよくわかりませんが、私はそう思っています。理由としては、少し前までは、歩く時に使っていた杖が一本だったのですが、行き来を繰り返すうちに二本に増えていたからです。私はその時、私が祖母の病気を悪化させているのだと思い、自分を強く責めました。そこで、当時の私は「おばあちゃんの元気が出るようなことをしよう」と思いました。反抗期が真っ盛りな時でしたが、明日の朝から変わると強く決心し、その日の夜は眠りました。

そして次の日の朝、勇氣をふり絞っていつもよりも大きな声で「おはようございます」と明るく挨拶しました。すると祖母は少し驚いた表情をしてから「おはよう」とにっこり笑って返してくれました。その時私は、挨拶ひとつで、人はこんなにも変わるのだと実感しました。

そしてまたある日、私と祖母は二人で買物に行きました。その時祖母が持っていた杖は一本でした。私が一本だけで大丈夫なのかと聞くと、祖母は、「里奈が変わったから私も少しは変わらない。」と言って微笑んで

いました。私が明日から変わると決心し、行動した日から、祖母も少しずつ良い方向に変わってきていて、とても嬉しかったです。

私はこれらをふまえて、ほんの少しの勇氣と強い意志で、自分自身や周りの人たちががらりと変えることができると思いました。ですが、それらだけで必ずしも良い方向に変わるとは限りません。良い方向に変えるには、自分でよく考えて行動することが大切です。何の考えもなしに、「取り敢えずやっておこう」というのはよくありません。誰かのために何をしたいのかを明確にし、それは相手にとって良いことなのかを考えて行動する、それが一番だと私は思っています。そして、これらの行動は福祉にも深く関わっていると考えています。困っている人に優しい言葉をかけてあげる、それだけで人生が大きく変わる人もいます。

一度自分を見つめ直し、何か自分に出来ることはないかを探し、勇氣を出して行動していくべきだと、私は思います。





## 笑顔をつくる介護

旭が丘中学校三年 加藤 紫乃

「周りに迷惑がかかるから行きたくない。」

五年前、親せきの結婚式の数ヶ月前から、曾祖父に会うといつもこの言葉を言っていました。なぜなら、当時九十三歳の曾祖父は、緑内障という病気で、両目ともほとんど見えなかったからです。長年住んでいた自宅ではなんとか生活できていましたが、外出することはなくなっていました。その結婚式には、我が家も全員招待されていたので、時間をかけて説得し、車イスで出席することになりました。そしてその日が、私が初めて車イスを体験した日であり、体の不自由な人の生活を色々と感じた日でもありました。

その結婚式の日、会場で会った曾祖父は、初めての場所で様子が全く分からないせいか、じっとして静かでした。親せきがあいさつに行くと、声だけで判断して話していました。その様子を見ていて、目の見えない人にとって、初めての場所は、かなり不安があるということが分かりました。また、いきなり声をかけられるということにも不安を感じることに気付きました。

二つ目は、部屋を移動する時です。父が

車イスを押していました。案内された通路は車イスでは通れず、父はかなり遠回りをし移動していました。バリアフリーの社会になってきたとは言っても、まだまだ整備されていない所が多いということを感じました。

三つ目は、食事の時です。順番に料理が出てきましたが、曾祖父にとっては、どこに何が置かれているのかわかりません。隣の席の父が、一つずつ前に置き、一つずつ中身を説明していました。その結果、曾祖父は自分で食することができていました。本当なら食べさせてあげたほうが良いような気がしましたが、曾祖父は何でも自分でやってきた人なので、人に食べさせてもらうより、一人で食事が出来る事がとても嬉しそうでした。それを見て、介護というのは、こちらの都合ではなく、相手の立場になって考えることが大切なことだと思いました。

そして帰る時、電車と一緒に乗りました。私は、その時初めて、電車に車イスが乗っているのを見ました。駅員さんが台を準備して乗せてくれて、降りる駅でも駅員さんが待っていてくれました。電車の中に車イスのまま乗れるスペースがあることも、その時初めて気付きました。

別れる時、曾祖父は、

「すまなかつたなあ。ありがとなあ。」

と、何度も何度もお礼を言っていました。出席することをおんなに嫌がっていたのに、私があの日見た中で、誰よりも一番楽しそうでした。その様子を見ていて、お世話していた父も母も嬉しそうでした。そして、その日から半年も経たないうちに、曾祖父は亡くなりました。

あの日体験で、体の不自由な人が生活するには、色々な人の協力が必要だと実感しました。そして、安心安全に暮らすためには、もっともっと設備などの環境的な充実が必要なのは当然ですが、人の心や思いやりも同じくらいか、それ以上に大切だと感じました。少しでも快適な生活ができるように、環境と人の心の両方がより良い社会になっていくってほしいと願います。

あの日、私は何もできずに、ただ見ているだけでした。そしてあの日以来、体の不自由な人と身近に接する機会はありません。しかし、もし機会があれば、何か自分でもできることを見つけて、行動できる人になりたいです。あの日曾祖父の笑顔を思い出して、声をかけ、手を差しのべる勇気を持ちたいと思っています。



寒川町社協は、小中学校でも取り組んでいます！

## 地域の中でともに生きる力を育む福祉教育

### ～地域の中にある学びの場～

福祉教育は身の回りの人々や地域との関わりを通して、そこにある福祉課題を学び、その解決の為の行動する力を養うことを目的としています。

身近な地域に暮らす、障がいのある人や高齢者を含めたさまざまな人々と関わり、多様な生き方に触れることで、子どもたちは思いやりの心、相手を理解しようとする気持ちを育みます。

### ～育まれる力、認め合う心～

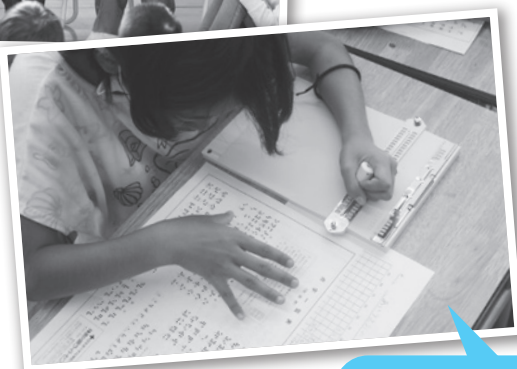
こうした出会いや関わりを通じて、自分と違う立場の人と認めあい、人の気持ちに共感できる力や自分の考えを表現する力、考えを実行に繋げていく力など、「ともに生きる力」をつけていきます。それは子どもだけでなく、そこに関わる大人や地域も共に学ぶことができるのです。

さらに子ども達が、地域の中で交流や活動をすることで地域の人から感謝されたり、大切に思われていることを実感でき、自己肯定感を積み重ねていくことができます。

寒川町社協はこれら福祉教育を子ども達の学びを地域とともに進めるため、人と地域、学校などとの“地域のつなぎ”を行っています。

車いす体験

手話体験



点字体験